

# スクールライフサポーターの実践を通して

神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課 櫻井 英明

神奈川県教育委員会では、大学及び市町村教育委員会と協定を締結し、大学生等を県内の公立小学校に派遣するスクールライフサポーター派遣事業を展開している。児童の問題行動等の未然防止につなげるとともに、将来教育に携わる希望がある大学生等の資質及び意欲の向上につなげる。さらに今後、公立中学校に派遣する展開も踏まえ、本事業について紹介していく。

## 1. 事業の発足について

神奈川県では、いじめや暴力行為、不登校等児童・生徒の問題行動等の件数が多く、憂慮すべき状況が続いている。

そこで、県教育委員会では、児童の問題行動等の未然防止に役立てるため、将来教育に関わろうとする大学生等を、神奈川県内の公立小学校に派遣する「フレンドリースタッフ派遣事業」を平成19年度に開始した。その後、その趣旨を引き継ぎ、平成21年度からは大学及び市町村教育委員会と県教育委員会が協定を締結し、「スクールライフサポーター（以下、SLSという。）派遣事業」を開始した。

## 2. 事業開始に至るまで

SLS派遣事業は、所定の研修等を受けた大学の学生及び卒業生を「SLS」に任命し、原則1年間、週1回程度、市町村教育委員会の所管する小学校に派遣するものである。この事業は、次の(1)～(3)の部門から構成されている。

- (1) 大学のインターンシップ制度を活用する「インターンシップ部門」
- (2) 学生等のボランティアを活用する「ボランティア部門」
- (3) かながわティーチャーズカレッジチャレンジコースの活動の一部とする「ティーチャーズカレッジ部門」

実際に、この事業への参加を大学生等が希望する場合、一定期間の研修を行い、SLSとして任命した上で要請のあった小学校に派遣する。SLSは、児童にとっての身近な遊び相手、相談相手として、また教員にとっては補助的な役割として、学校の教育活動を支援する。

前述の(1)(2)の部門において、SLSとして活動する場合、事前研修（前期は5月、後期は8月）を受ける必要がある。研修の内容は様々な分野の講話を聞いたり、参加者同士で協議したりするなど、様々であるが、学校でボランティア活動をする上で基本的な内容である。



講師の話聞き、様々なことを学ぶ



体を使い、共に活動する気持ちを学ぶ

(3)の部門の場合、講座の受講や学校での体験を通し、教育的ニーズに対応する実践力の向上を図り、県の教育についての理解を深める県教育委員会の事業、かながわティーチャーズカレッジチャレンジコースの受講者として県が認め、修了する意思を有する者を対象としている。

### 3. 学生ボランティアに求めるもの

(1)～(3)の部門において、S L Sは原則週1回、派遣された学校においてボランティア活動を行う。事業を開始した平成21年度は、県内の公立小学校85校に126名のS L Sを派遣し、平成28年度までの8年間の派遣者数は延べ1,400名を超えた。

実際に派遣された小学校からは、「児童の気持ちの安定につながり、学習意欲が高まった。」や「子どもの気持ちを尊重しつつ、積極的に声をかけてくれてうれしかった。」との声が聞かれている。

S L Sが小学校において学習の支援を行うだけでなく、児童との関わりやふれあいの中で、児童の感じている不安や悩みを聞いてもらえる人が近くにいることの意義は大きい。そのため、学生には学習の支援をする教科のスキルがあるだけでなく、児童と学ぼうとする意欲や児童が抱く気持ちの変化を感じようとする心をもっていることが必要である。

学生自身も本事業での活動から得るものは多く、例えば学校行事で見せる児童の姿が教室で学習する時の姿とは違い、感動したと述べている人もいた。



子どもの学びに寄り添って、支援する

### 4. 今後の取組みに向けて

本事業の「ボランティア部門」のみであるが、平成28年度の後期から中学校への試行派遣を行っている。この派遣を希望した学生は10名で、県内の公立中学校に試行派遣されボランティア活動を始めている。

中学校でのS L Sの主な活動として、①学習

の進んでいない生徒などへの支援、②教職員が行う教育活動の補助等がある。

具体的に、S L Sの①の活動として、数学、英語、保健体育等の教科で、生徒の学習活動の支援を行っている。教員が授業を展開すると、授業の説明や指示が理解できずに困っている生徒に対して、再度説明する等の個別支援を行っている。



生徒の学習活動を支援しているS L S

また、あるS L Sは特定の生徒につききりになり、生徒への支援がうまくいかずに困る場面があった。しかし、派遣校の教員からの助言で、生徒との距離感をうまく保ち、生徒の学習に対する自主性を育むことにつながった。さらに、周辺の生徒との関係もよりよいものになり、学級の学習環境の雰囲気向上させることができた。

S L Sの②の活動として、学級の生徒が落ち着かない時に近くに来て、その生徒の後ろから見守りながら声をかけた。その結果、本人は落ち着き、他の生徒との活動に戻ることができた。

このようにS L S事業は、学校から考えると児童・生徒及び教職員に対する支援体制の充実が図られ、大学生等から考えると学校という現場を体験し、将来教員を目指す上でも貴重な経験の場となっている。

県教育委員会としては、本事業が小・中学校にとっても、大学及び学生等にとっても、よりよい方向に進むように事業を展開していきたいと考えている。